

# かごしまの昔話

むかしばなし

## 名刀「波平行安」

なみのひら ゆきやす



鹿児島市の谷山地区に平安時代の橋口正国（後に行安）を始祖とする刀工一族がおりました。刀を作るのに使った井戸が「波之平刀匠之遺跡」として今も残っています。また、笹貫や波平の地名にかかわる次のような話も伝えられています。

初代行安が京に赴く途中、瀬戸内海で暴風雨にあい、船が今にも転覆しそうでした。行安が自分の刀を海に投げたところ、海は静かになったので、刀の銘や行安の住んでいたところを「波平」というようになりました。

それから月日が流れて、鎌倉時代、行安（何代目かは不明）は、ある日、妻に、「自分はこの度、世間にまたとない名刀を作ってみたいと思う。早速今日から鍛冶場に入るが、お前は、いかなる用事があっても入ってはならないか、のぞいてもいかにぞ」と言うなり、鍛冶場にこもってしまった。そのまますま数日経ったので、妻は心配しました。食べものは鍛冶場の軒下に常に置いてあるので、時には食べているようです。しかし、立ち働く物音は昼も夜も絶えまなく響き、寝

ていることがあるのかどうかわかりません。体調が心配で様子をうかがっていると、不意に物音がしなくなりました。もしかして倒れたのではと気が気ではありません。とうとう、出入り口の戸を引いてのぞきました。すると、行安は「おおー」と言葉にならないうめき声を発しました。ちやうど最後の仕上げにかかり精神を集中させていたのに、一瞬ゆるんだのです。失敗したと思った行安は持っていた刀をそのまま裏の竹やぶに投げ込みました。

ところが、それからというもの、その竹やぶからキラキ



ラと光がもれてきます。気味悪く思った村人たちが近づいてみると無数の笹の葉を刺し貫いた刀が一振りありました。これより「笹貫」という地名ができたそうです。村人は、刀をとりあげ海に投げました。すると、今度は海中で光るので、網ですくいあげたのでした。その後、この刀は名刀として後世に伝えられ、現在重要文化財になっている「波平行安」とも言われています。

（原話『三国名勝図会』

『谷山史談』）

文／有馬英子 絵／二石綱夫